
赤い糸の先には…… ～Feelings of Kyoya～

ザード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い糸の先には…… 〈Feelings of Kyo ya〉

【Nコード】

N3611B

【作者名】

ザード

【あらすじ】

『結ばれるもの同士の小指にある赤い糸が見える』そんな不思議な目をもったIQ250の高校生、氷上鏡也。悩み知らずと思われてきたその天才の頭脳は、実は常に大きな悩みを抱えていて……ちよっぴり切ない青年達のラブストーリー。

第一話 「赤い糸」

「うお、やるゝ。これで何回目だ？V10達成？いや、中等部の頃から考えたらV28達成か。」

とある男子が、我らが学園、蒼月学園高等部の職員室前に張り出された順位表を見て驚いた。その視線は、「一位」とかかれた文字の下の名前に向かっていた。

彼の名前は雪野^{ゆきの}翼^{つばさ}。日本じゃ滅多にいない少し眇めの銀髪がトレードマーク。この学園に入学した頃からの俺の親友だ。ここ、蒼月に俺が入学したのは幼等部の頃からだから、いわゆる幼馴染とでも言う奴だろうか。

「相変わらずすごいな。それがIQ200のなせる業ってやつか？」

俺は短い黒髪を掻きながら、軽い苦笑いをしていた。

「俺はIQ250だ。そんなちやちなIQと一緒にしてくれるなよ。」

と、俺は少し自慢にもなるような発言をしてしまった。毎度のことだが、俺は本音がすぐ出てしまう性格なので色んなやつらに毛嫌いされている。

「悪いな、また間違えたみたいだ。アニメだとか見ると、大抵天才キャラのIQは200だからな。かぶるんだろう。」

しかしまあ、こいつは全然そんな俺に嫌悪感をもつことさえもな

いみたいだ。そうでなければ、俺みたいなやつと幼等部の頃から一緒に入られないだろう。

「さてと、俺は部活にいつてくるぜ。お前もまだ2年なんだから、どこかの部活にでも入って活躍くらいしろよ?」

そういうと、翼は教室へと帰っていった。

あいつは野球部でキャッチャーをしている。俺ほどでないにしても、あいつもかなり頭がいい。頭の弱いピッチャーをリードするには上等な頭だ。

……こんなことばかり言っていると、なんだか俺って嫌なやつに思われそうだな。

「さて、俺も帰るか。」

帰宅部の俺は、授業が終わればすぐに帰れる。運動神経も別に悪くはないから部活をしてもいいんだが、いかんせんやる気が起きないのだ。若い内からこんなだと、将来が思いやられる気もするけどな。

12月の寒空の下、家への帰路へと俺は足に向けた。

「ふう。寒いな……」

まあ、いいさ。寒いのはまだ許せる。重ね着すれば外にいたって寒さは防げるからな。だが暑いのは許せない。夏の暑さは防ぎようが無いじゃないか。半そで半ズボン、これ以上外で涼しい格好になるうと思えば、それこそ裸になるしかない。そこまでしたって涼しくなるわけでもないしな。

などと、俺はどうでもいいことを真剣に考えていた。

「やべえな、夏まであと半年しかねえじゃん。はあ、夏が来るたび鬱になる……」

そんなことを呟きながら、俺は学校から下校をしている。

ああ、そういや自己紹介が遅れたな。俺の名前は氷上ひかみ鏡也きょうや。

身長170ちょい、運動神経まあまあ、顔は……どうだろ、告られることもよくあるけど、実際モデルみたいにいいいわけでもないな。まあ、悪くもないと思うけど。そんなどこにでもいるような高校生。ただ普通じゃないところもある。

その理由1、俺が「天才」だということだ。さっき翼が言っただろう？俺のIQは250もあるのだ。まあ、自分でいうのもなんだけどさ。

しかし、こういう状況はそのIQの無駄さがよくわかるというものだ。どんなにIQが高くて、テスト用紙などに向かわなければまったく意味をなさない。どれだけIQが高かろうが寒さは全然防

げないじゃないか。翼は寒さに強いからこんな時期に部活ができるが、俺は絶対ゴメンだ。暑いのも嫌だが、寒いのだって嫌だ。まったく、十二月の時点でこの寒さだ。二月頃は厳しくなりそうだな。

「キョーヤ!!」

そんなくだらないことを考えていると、後ろからいきなり誰かが俺の背中に乗っかってきた。確認するまでもない。俺の知っている人物でこんなことをするのは一人しかいない。

「凜、人の背中にいきなり乗るなよ。」

俺はいきなり背中に乗りかかった少女に言った。

「どうせ帰り道一緒だしさ、ついていっていい?」

「別に予定はないしな。」

「んじゃ、決まり! あ、そうだ。これから一緒にCDショップ行かない?」

「………帰るんじゃないのか?」

毎回毎回、俺は凜のペースに乗せられている気がするな。

「寒いねえ。」

「ああ、そうだな。」

そんなどうでもいいことを話しながら一緒に帰路を歩いていた。

いや、どうせCDショップに行くことになるだろうから帰路じゃないか。それに歩いているのは俺だけだ。凜は未だに背中の上。

毎度毎度、紹介が遅れて悪いな。彼女の名前は水城みずしろ 凜りん。俺と同じ高二とは思えない身長の子だ。確か、150ちよつとの身長だったと思う。顔立ちは可愛いらしいし、非常に明るい子なので、学年だけでなく学園全体的に見ても人気のある子だ。

なので、その女の子が俺の背中の上にいるというのはあまり望ましいことではないのだが、こいつは出逢った頃からずっと俺の背中に乗る癖がある。まったく、男として嬉しいには嬉しいが困ったもんだ。

「なあ、そろそろ降りる気にはならんか？」

少し呆れ果てた様な顔で言う。

「別にいいじゃん♪あれ、それとも学園のアイドル、水城 凜ちゃんの柔らかな胸が当たっているのが恥ずかしいのかな？」

「ふむ、胸の大きさというのはそれなりに身長と比例するものなんだな。」

ガン、という鈍い音と共に、俺の頭には鈍器で殴られたような痛みが走り、俺の体は地面に倒れる。うん、おかしいよね。普通、高校生はカバンの中に殴れるような鈍器は入れないもんだよ。

「こゝら、そういう発言は女の子に対してはタブーなんだよ。」

「どっから出てきた、その鈍器……」

いてて、と呟きながら顔をあげてみると、その視線の先に偶然にもカップルがいた。

「どうしたの、鏡也？あ、もしかしてあのカップルがうらやましいとか？」

「違うっつの。あゝいや、でも確かにうらやましいな。あのカップル、ちゃんと結ばれるよ。」

それだけ言うと、俺は殴られた後頭部を押さえながら立ち上がる。

俺が普通じゃない理由その2、俺は目を凝らせば、その人間に小指に、あるものが見える。「結ばれるもの同士の小指には赤い糸がある」って言われてたことがあっただろ。こんなことを信じてる人もういないか？普通に考えたらありえないだろ、と思うことだ。でも、な……俺には見えるんだよ。なんでか、な。

「ふゝん、根拠は？」

「俺のIQ250がそう告げている。」

でも、俺はそれを翼以外には言ったことがない。だって、信じる奴はいないだろ？翼でさえ半信半疑の話だぜ？

「そういえば、今回の期末テストで28回目の順位一位だったっけ？すごいねゝ、IQ250って。」

それだけ言うと、凜は再び俺の背中に飛び乗る。はあ、とため息をつきながらも、俺の足はCDショップへと進んでいった。

『結ばれるもの同士の小指にある赤い糸が見える』

この能力^{ちから}は何のため？いつまでたっても、俺は答えを見つけられない。まったくもって、IQ250は無駄なもんだ。

でも、使用用途がわからないとダメだろう？そんなものは、無駄な能力というものだ。そんな無駄な能力なら、俺を苦しめるだけの能力なら、俺はそんなもの、欲しくはなかった――――――

「キョーヤ、どうしたの？」

「あ、ああ、悪い、ブーツとしてた。さて、そろそろ帰るとするか。」

「うん！よし、家に帰ったらすぐに聴こう！」

CDショップで欲しいCDをゲットしてテンションが上がり、幸せそうな満面の笑みで俺の背中の上に乗る凜。

しかし、その上げすぎたテンションのせいで疲れてきたのか、次第に目がうつろになり、最終的には眠ってしまった。ちなみにテンションあげてから眠るまでの時間は約10分。

「……まったく。」

相変わらず、子供みたいなやつだな。

蒼月学園から家まで出さえ2時間かかる。CDショップからなら2時間半はかかるのに。家までこんな恥ずかしい状態で帰れるのか？まったく、ある種の拷問か、これ。

「ん、キョーヤ……」

「……はあ。」

と、盛大なため息をつく。勝手に自分の夢の登場人物に俺を加えてんじゃねえよ。

「……大好き。」

「……まったく。」

今の言葉は、おそらく俺に対してのもの。知ってるつもり、こいつの気持ちは。それは別にIQ250だからとかじゃない。

ただ単に――――

――――その気持ちが通じてるから。こいつの抱くその感情は、同じく俺の抱いている感情だから。

でも、いや、だからこそ――――

――――あと一步が、踏み出せない。

「人の背中に乗るなどは言わん。だが、寝るのだけは勘弁してくれ。」

「むゝ、だって眠かったんだもん……」

「ガキかお前は、まったく……じゃあな、また明日。」

凜を家に届けると、俺は自分の家に向かう。どうせ家はとなりだ。10秒とかかりはしない。

「ふう、ただいま。」

家の玄関の扉を開き、誰になく寂しく呟く。

その言葉に対して、「おかえり」と優しく返事をしてくれる人などいない。ただ代わりに、「ニャ〜」という可愛らしい泣き声だけが寂しく響く。

「相変わらず無駄に広いな、この家は……」

普通の一般住宅とほとんど変わらない広さの家も、1人で過ごす広いものだ。この家の住人が大抵学園で一日を過ごす俺しかいないので、ほとんどこの猫のためだけの家になっているようなものだ。

「晩飯、なんにするかな。」

そう呟きながら台所へ向かう途中、俺の視界に写真たてが入った。

「水城 凜、か……」

あいつと会ったのは、翼と会うよりも前のことだった。

俺の両親と凜の両親は、学生時代からの親友だったらしい。家を近くに建てたのだってそれが理由だ。

凜が俺との出逢いを覚えているかどうかは知らない。2歳くらいの頃だから。俺が覚えているのは天才だから。

天才と秀才の違い、教えておこうか？ 秀才は努力という代価を出して知識を吸収していく人種だ。

天才というのは、早い時期から自我が芽生え、普通なら上等な知識を吸収できない時期から知識を吸収できた人種を指す。

つまり、天才というのは物心つくのが普通の人より早いのだ。小さい頃はなんにでも興味をもっただろう？ そういう年齢の頃に難しい知識を吸収できるわけだ。それ故にIQも高くなってくる、とい

うことだ。そういうことを考えると、結局勉強に必要なのは興味だ
ってことだな。

まあ、そういうことで、俺は普通の人よりもの心つくのが早かつ
た。だから、あいつとの出逢いも覚えている。

「りんちゃん、だいじょうぶ？」

俺たちが初めて会ったのは、お互いの両親に公園に連れて行って
もらったときだった。俺たちはすぐに仲良くなった。それで追いか
けっこをして遊んでいると、凧が転んでしまったのだ。

「ん、へいき……」

「でも、ちもでちゃってるよ！とりあえず、みずでながさなきゃ！」

「うん、わかった……いたっ！」

立ち上がろうとしたところで、凧は足を押さえてまた座り込んで
しまった。俺はその凧を背負ってあげた。このときからだ、凧が俺
の背中に乗るようになったのは。

「ありがとう、きょーやくん。」

俺たちの親はその状況を微笑ましく眺めていた。その両親が、あんなことになるなんて思ってたんだよ……

続く

第二話 「源」

俺の意識は、ハッキリしていなかった。ただわかったことは、紅く染まった視界と、全身が水を欲するような感覚だった。

「火事だ！あそこの住宅から火が出てる！」

この大声が聞こえた時、俺の頭はようやく完全に覚醒した。

俺たちが小学生になってから数年たった冬のある日、凜の祖父の家に家族で泊まりに行ったときのことだった。木造建築の、ちよつと古めの家だった。

泊まりに行った当日、俺は非常に疲れていた。こんな真冬だというのに、凜の無茶に付き合って汗だくになるまで走らされたのだ。

「ううー、しんどー。」

と、呟きながら、家に入ると汗を拭いたタオルを近くに置いた。冬に汗が出るほど走ると、すぐに体が冷えてしまう。そんな体を温めてくれるほど、室内のストーブは暖かった。

しんどかったせいで冷静な思考がストップしていたんだろう。俺はタオルを置く位置をしっかりと確認していなかった。

ストーブの上に置かれたタオルは、少しずつ紅い光を放っていた。

「火事だ！消防署には連絡行ったのか！？」

外から必死の大声が聞こえる。しっかりと目覚めた俺の思考は、今の状況の絶望をしっかりと理解していた。

まず、第一に出口が無い。扉をあけようとしてみた、窓も開けようとしてみた。しかし、どちらも全然あいてくれない。

そして第二に、日の出はこの部屋だということ。もう真っ赤な炎が俺を飲み込もうと徐々に近づいてくる。

「うわああ！誰か、誰か！！」

俺はこのとき、初めて心から泣き叫んだ。死が迫ってくるという絶望、何もできないという無力感、その二つが俺の心をさらに絶望へと落とし込む。無理だ、もうどうしようもない、と諦めたときだった。

「浩二！奈那子！晴海！鏡也！」

家の中から大声が聞こえてきた。おじさんの声だ。凜のお父さんが助けに来てくれたのだ。

「おじさん！助けて！僕ここにいますよ！」

俺がそう叫ぶと、扉の向こうで何かをどけているような音が聞こえた。どうやら家のどこかの部分の木材が折れて扉を塞いでいたのだと思う。

「大丈夫か、鏡也君！」

おじさんは消防士なので、こういった中でもすばやく行動ができる。そのおじさんが助けに来てくれたことで、俺は大いに安堵した。

「出口まで一緒についていこう！ 離れないようにしてくれ！」

「うん。」

疲れ果てたように力なく俺は頷く。そして、この家の広さを改めて体感しながらも、俺は外の空気を再び吸うことができた。

「鏡也君、君のお父さんとお母さんはどこにいるかしらないかい？」

「違う部屋にいたから……ごめんなさい。」

「いや、謝らなくてもいいよ。」

それだけ言い残して、おじさんは再び火の舞う家の中へと入っていった。俺の記憶に残る、おじさんの最後の後姿は、今後いつまでも俺の心に刻み込まれた――――

『昨夜、〇〇県の××市にて、火事が起こりました。報告によりますと、4つの焼死体が発見されたことから、死亡者は4名。原因は現在警察が模索中です。』

冷静沈着なアナウンサーの声が、また一つ俺の心に傷を刻む。

あの後消防署が駆けつけて、火はどうにか消えた。しかしその炎は、一緒に4つの命も道連れにしていた。信じられなかった。いつも見てるテレビだったら、こういう場面でヒーローが現れて奇跡的にみんなを助けてくれるはずじゃないか。そんなくだらないことを思ってたよ。

『新しい情報が入りました。この火事の原因は、どうやら不注意で置かれたストーブの上のタオルから引火した模様です。』

言葉のナイフが、現実という名のナイフが俺の心を切り刻んでいく。頭が良いせいで、事態の重要性は理解できた。その代わり、幼いせいで俺の心は崩れかけていた。

……奪ったんだ、俺が。4つの尊い命を。

……奪ったんだ、俺が。凜の大事な両親を。

「う、う、うう……」

「キョーヤ君なんか……キョーヤ君なんか……死んじやえばいいんだ！」

事件の後、凜に今回の事件の原因を告げた後の第一声がそれだった。この言葉が俺の心には一番響いたさ。この頃から、俺は凜のことが好きだった。

ああ、悪いがドラマみたいな素晴らしい何かがあったわけじゃないぜ。ただずっと一緒にいて、それが当たり前になってきた。気付けば、ずっとそのままでいられたら……って思うようになってただけだ。

そんな相手に、死ねって言われたんだぜ？流石に辛かったよ。翌日は凜にすごい謝られたよ。「酷いこと言ってごめん。」てな。謝るのは俺の方なのによ……

「この写真を取った頃は、本当によかったな……」

手にとった写真たての中の写真を見れば、俺と凜だけじゃなく、お互いの両親も映っていた。

俺は、凜の両親を奪ったから――――

――――俺は凜を求めちゃいけないんだ

これが、凜との関係をもう一步踏み込むことができない理由。ずうずうしいだろ？人の大事なもんを奪っておいて、俺が何か大事なものを求めるなんて。

俺は凜が好きだ。好きだからこそ、あいつを求めちゃいけないんだ。

「ちょっと昔のことを思い出しすぎたな。」

あの事件を思い出すたびに、俺は胸を痛める。何が天才だ、その

天才の馬鹿な行動のせいで、俺は人を傷つけた。人を殺したんだ。だから俺は、人の心を傷つけるようなことは絶対しないと心に誓った。

「どうせやることもないんだ。飯食って風呂はいつてさっさと寝るか。」

それから1時間の間に、俺は飯、風呂等を済ませて布団へともぐった。まだ8時だった。今時、こんな時間に寝てんのは幼稚園児くらいだっつーの。まったく。

続く

第三話 「繋がらない『何か』」

「えー、言うまでもないと思います。それにこの中に実行犯、何人かいるのはわかってますから。」

翌日、学校では二年生だけを体育館に集めて集会が開かれていた。前に立っている女性は俺たちの担任の光子先生だ。俺は今、先生のいつている言葉の意味が分からない。しかし、周りを見れば何故か苦しそうな顔をしてるやつらがチラホラ。

「翼、最近俺たち何か悪さしたっけ？」

「さあな。お前があれこれ工作して教頭ヅラ疑惑を疑惑じゃなくしたことと、凜がお前の背中に乗ろうと誤って校長の背中に乗っちゃってしまったことくらいじゃないか？」

「いやいや、俺が教頭のヅラ疑惑を証明するのは学園全体のためだ。別に怒られることじゃないだろう？凜のことにしたって、あいつもすごい謝ってたんだから、あの心の広い校長のことだ、許してくれると思う。したがって、俺の結論としては……」

「それは関係ないんじゃないか？」

「真顔で言っただけのけるあたり、お前も中々すごい神経をしてるじゃないか。」

そんな雑談をしていると、前に樹先生が出てきた。

本名は伊藤 樹、パツとみでは高校生とあまり変わらない様に見

える先生だ。しかしその頭脳は完璧で、全教科の教員免許を持っている特別教師だ。なぜこの蒼月に赴任したかは知らないが。

「みなさんがカンニングをしたことはもう分かっています。が、しかし、この先生がそのかしたことが最近わかりました。ですから、この樹先生が一週間の謹慎処分でみなさんのカンニングの件はなかったことにします。」

どよどよっ、とざわめきが広がった。なるほど、こいつらカンニングなんかしてたのか。でも教師がそれをそのかしたってどういうことだよ……

「いや、でもさー、もともとテストってさ、いかにばれないように工作をしてカンニングできるかを見るものじゃなかったっけ？」

樹先生が苦笑交じりで話し始めた。

「樹先生！テストは学力を測るのが目的です！」

「いや、でもね、光子先生、俺たち大人は子供たちを紙の上の点数で測るのはどうかと思いますよ。もっとこう、人間としてどうかって事を見ていけないとね？」

なんか立派なこと言ってるけど、そのこととカンニングをそそのかしたことって関係ないだろ。

「まったく、最近の世の中はどうかしてるな。一年生のやつらに言ったら馬鹿にされるし、三年生のやつらに言ったら荒神 浩介ってやつに殴られるし……」

荒神先輩、誰だか知らないけどご苦労様。

「樹先生はもう黙ってください！とにかく！今回の件は樹先生の謹慎処分です。その代わり、皆さんにはもう一度テストを受けてもらいます！」

ええー！！、というブーイングがあがる。元々原因はお前らだろうが。

「なお、今度のテストでまたカンニングが発覚した場合、カンニングしたものはペナルティとして一年生からやり直してもらいます！反対意見は聞きません、以上！」

そういつて光子先生は怒りながら体育館から出て行った。樹先生はトレードマークのタバコを吸いながら面倒くさそうに職員室へと向かっていった。

残された生徒の大半は、生きる望みを絶たれたような感じになっていた。

「もともとカンニングなんて馬鹿な真似をするのが悪いんだよ。まあ、確かに凜が80点代オンパレードだったのは気になってたけどな。」

「どうせわかんないよ、全教科100点の人には……」

凜は体育館での集会の後、子供みたいに泣きじゃくっていた。

このクラスでは男子で俺と翼、あと御柳ってやつの3人、女子では伏見って子と春日って子の2人、合計この5人以外は全員カンニングしてやがった。気にはなってたよ、なんだか今回やけに平均点が高かったから。

「まあ、お情けでテストは冬休み中って言ってんだし、勉強時間が増えたと思って頑張れよ。」

翼が凜を勇気付ける。その様子を見てみると、泣いてる妹を兄が慰めてる、見たいな感じだな。

「ねえねえ、キョーヤ。」

「なんだ？」

「今日ね、勉強教えてくれない？キョーヤの家に行くからさ。」

「おお、それいいかもな、鏡也。ここ最近俺も鏡也の家についてないからな。俺も行くぜ。」

おいおい、勝手に決めるなよ。そう言おうとしたが、もはや2人とも聞くつもりはないだろう。

キーン、コーン、カーン、コーン♪

「あ、昼休み終わりだ。それじゃあ、また放課後ね！」

そう言って凜は自分のクラスに帰っていった。翼と俺は同じクラスだが、凜だけはクラスが別だし、昼休み明けの授業は樹先生の授業だったんだが、それがないとなると退屈だな……

「サボるか……」

この学園のすごいところは、それなりの結果を出していれば、別に堂々と授業をサボってもお咎め無しなのだ。最近では結果を出せてないやつがサボってお咎め無しだけだな。自由を第一に考えた校風らしいが、自由も行き過ぎたら明らかにアウトだろ。

「なんだ鏡也、サボるのか？じゃあ、俺も行くぜ。」

ちなみに翼は今回のテストでカンニングをせずに五位だった。ちなみにひとつの学年に400人いる学年で、だ。普段は三位を取れるほどの頭なので、こいつもあんまり授業を受ける必要はない。ある意味サボりの常連組である俺たちは、いつも通り屋上へと足を進めていった。

「鏡也、ほれ。」

屋上へあがると、どこから取り出したのか、翼が焼きそばパンを

投げてきた。

「俺の昼飯。分けてやるよ。」

投げ渡された焼きそばパンの袋を開いた。ここの購買部のパンは、どれも期待していいおいしさだ。蒼月の自慢の一つ。

「……鏡也。俺が今から言うことは友達同士のくだらない冷やかしじゃあない。くだらない詮索でもない、真面目な話だ。」

「どうした？ 藪から棒に。」

翼は一緒に買ってあったカフェオレを飲んで軽く間を置いた。しばらくの沈黙の後、真剣な面持ちで口を開いた。

「……ずっと前から気になってただけど……な。お前、なんで凜とくつつかないんだ？」

……は？

「真面目な話って言うから何かと思ったら……別に理由なんてないさ。俺たちはただの幼馴染。それ以上でも以下でもないさ。」

「俺の目は節穴じゃないぞ。お前も凜のことが好きだし、凜もお前のことが好きだ。そして、お前もそのことに気付いてる。」

……IQという数字の上では俺は翼より上だ。でも、俺は常に俺より翼のほうが天才ではないか、と思う。こいつの観察力、洞察力はハンパない。隠し事なんて全然通じはしないんだ。

「……まあ、なんていうかさ。ロリコンと思われるのは俺、嫌だからな。どう見たって同じ年齢には見えないだろ？」

と、俺はとりあえず嘘をついてみる。でも、最初から通じないことはわかってた。

「鏡也、俺は真剣なんだ。そんなくだらない話を聞きたいわけじゃない。」

まあ、予想通りの反応だ。昔からそうだ、こいつは観察力とかが並じゃない。

「……お前は俺の幼馴染だし、親友だと思ってる。だけど、その異常なまでの観察威力と洞察力だけは嫌いだな。」

「悪いな、観察力も洞察力もキャッチャーには必要な要素でな。」

口元に軽い笑みを浮かべると、翼は屋上の床へと腰を下ろす。俺もそれにあわせて顔で笑みを作った。でも、やるべきじゃなかったな。心のそこを見抜かれた俺はうまく笑えなかったみたいだ。

「んじゃ、本当のことをいうよ。……昔の火事のこととは知ってるだろ？その時、俺は凜の家族は奪ったんだよ……そんな俺が、凜を求めるわけにはいかない……」

と、俺の理由を言った……つもりだった。いや、本当はわかってた、これも完璧な理由じゃないってことは。

「鏡也、それは本当の理由じゃないな。正確に言や、それは本当の理由の一部……違うか？」

誰にも明かしたことの無い胸の内を、翼は完璧に言っただけのける。

ははっ、お前すぎるよ。それだけであれば昔の時代なら一軍の長、いや、一国の長になれたかもな。

「怖いんだろう？ 本当は。」

「おい、翼。お前、一体なに言っただけ……」

俺がそう言おうとしたが、翼は強引に俺の言葉をさえぎった。

「素直になれよ。わかってんだよ、お前が怖がってるのを。お前、天才だけどやっぱり馬鹿だ……本当は、傷つきたくないんだろ？ もしいつか凜に拒否されたら、また凜を傷つけたら……そんなことを考えてたんだろ？ そうなったらお前は自殺に走るかもしれないからな。でも、おそらく起きないであろう未来に怯えて、もう一步を踏み込むことができないなんて、情けないじゃないか。」

翼は苦笑交じりで語って見せた。そうだ。その通りだった。本当は、ずっと前から気付いてた。俺は、ただ逃げてただけだって。あいつや、俺自身を傷つけないように。

「……本当に、俺はお前にだけは隠し事ができないな。でも、翼。このことに関してだけは、何も言わないでくれるか？」

言われて意識した。でも、実際はずっとわかってたんだと思う。だから無意識に妥協をしていたんだ。愛情なんか求めない、これ以上深い関係にはならない。そういう妥協の上で、俺たちは幼馴染のままにいるんだと思う。

愛情とは諸刃の刃だ。非常に強く大きな感情である反面、とても脆く崩れやすくもある感情。

でも友情なら、そう簡単には崩れない。深い関係にはなれない、けどその関係は長く続く。好きな相手との友情なんてものは、結局は愛情の妥協作品でしかありやしないんだから。

「鏡也……お前が俺の観察力とかを嫌うように、俺もお前の天才のくせして馬鹿なところは大嫌いだぜ。」

それだけ言い残すと、翼は屋上から出て行った。天才だけど馬鹿……か。お前の言うとおりだ、翼。でも、俺は間違ってるとは思わない。

別に俺はそれでいい。凜と一緒にいられるなら、それがどんな形だろうと構わない。どうせ俺と凜はどうあっても結ばれやしない。予感でもなんでもない、俺にはそれがわかるんだよ。

本当はわかりたくなかった……知らずに生きていたかった……

「……………あれ？」

ふと気付けば、俺の目からはたくさんの雫が頬をつたって床へと落ちていつていた。ぬぐってもぬぐっても、その雫は止まることはなかった。

目をよくこらしてみた。涙で滲んでよく見えなかったけど、俺の小指からはしっかりと赤い糸がどこかへと伸びているのが見えた。

続く

第四話 「不思議な感覚」

「……なので、ここはこの定理を使って解いていきます。」

授業中が、俺にとっては退屈でたまらない。先生が話している内容のうち、99, 99%分かっているからだ。

ぶっちゃけ、俺は授業を受けている意味が無いと思う。ノートをとっているふりはしているが、実際には真っ白だし、でも席は一番後ろだから先生にはばれない。ちなみに翼の場合は、一番前の席だから仕方なくノートを取っている、って感じだ。

とりあえず、今の俺は本日最後の授業であるこの授業を寝るかねまいかで悩んでいた。

「今の説明さえ聞いていれば、この問題は解けると思う。それじゃ、この問題を……」

そう言って先生はあたりを見渡す。みんなは指名されたくないのか、必死に先生と目を合わせないようにする。ああ、ちなみに先生は俺と目線が合っても絶対に俺を指名しようとはしない。

「それじゃあ御柳、この問題を解け。」

「ういゝッス。」

指名された奴はだるそうに黒板に向かう。こんないつも通りの流れもいい加減飽きてきたな。もういいや、寝よ。

そう決めた瞬間、一気に俺を睡魔が襲う。俺はその睡魔に逆らうことなく、机に顔を伏せた。しかし、そのまま寝る前に、不意に大きな声が教室に響いた。

「おい、そこ！居眠りするんじゃない！」

顔を上げてみると、先生がこっちの方へと歩いてくる。うわあ、面倒だな。また説教が始まるぜ。

しかし先生は俺の席の横を通り過ぎて、俺の後ろの席の前で止まった。

「いつまで寝ている！起きろ！」

かなりの大声で怒鳴っているのだが、俺の後ろの子はいつこうに起きる気配がない。先生は再び大声で叫ぼうとしたが、そのタイミングでまるで狙い済ましたかのようにチャイムが鳴り始めた。

「……氷上、起きたらこれを春日に渡しておけ。」

「ういッス。」

それだけ言うと、先生は号令もさせずにイライラとした足取りで教室を出て行った。後ろを見てみると、そいつは未だに起きようとしなない。

「はあ……おっい春日、起きろ。」

後ろの席の女の子、春日^{かすが} 亜沙美^{あさみ}の頭をつついて起こそうとする。にしてもこいつが居眠りなんて珍しいな。実際、こいつが居眠りし

てるところなんて初めて見た。

春日は、このクラスの女子委員長をしている。彼女も学園全体で人気がある。見た目は凜とは真逆の、いわゆる美人といった印象を受ける。校内に春日ファンがたくさんいるくらいだ。口調は丁寧でゆっくりしていて、どこか大和撫子っぽい感じがする。綺麗で長い茶髪のポニーテールで、本人が入部しているテニス部では、その髪が尻尾のようにブンブン振り回されることから、ファンから『尻尾小町』と称されることもあるそうだが……俺に言わせりゃネーミングセンスゼロな気がするあだ名だ。

ちなみに成績もとてもよく、学年順位では大抵二位。翼よりも頭はいい。なので、俺視点から見れば、おそらく数少ない俺と話のレベルが合う人間だ。まあ、それでも喋ったこと無いけど。ああ、ついでに凜とはよく話すけど、ぶっちゃけ話のレベルはあんまり合わない。

「ん……ふあ……あれ？」

数十回頭をつついた結果、ようやく春日は目を覚ました。

「わ、私……寝てましたか？」

「先生が怒鳴っても起きないほどの熟睡っぷりだったぞ。ああ、そうだ。職員室への招待状ももらってるぜ。」

俺が渡した紙を見て、春日の顔がサア、と蒼ざめた。紙には、『部活をサボってでも放課後職員室に来い』に書かれてる。ちなみに、殺気の先生は説教がとて長いことで評判だ。そうだな、最短で2時間は説教が続くぜ。

春日は「ど、どうしましょう……」と慌てた様子で時計を見ていた。周囲の『やっと帰れるぜ』という心情を表す笑顔満載のクラス
のムードとは正反対に、春日は絶望感を漂わせていた。

「テニス部の奴に一言言って置けよ。」

「はい……」

落ち込んだ感じで帰る仕度を整えると、チラリと時計を見てしよ
ばしょぼと職員室へと向かった。

「おーい、鏡也！一緒に帰ろうぜ！」

いつも通り帰る仕度を整えた翼が声をかけてきた。普段どおり翼
や凜と一緒に帰ろうと思ったが、先ほどまでの春日の行動が気にな
った。

（やたら時計を気にしてたな……何かあんのか？）

別に親しいわけでもないのですさほど気にすることも無いだろう、
と思ったのだが。

「悪い、ちょっと用事がある。」

と言って、一人で走って家へと向かった。

「ふう……相変わらず長いな、あの先生。」

俺が学園を出たのは確か五時だったはずだ。でも、すでに日は暮れ、俺の腕時計の短針は『7』を指していた。

寒い冬風邪が吹く中、俺は自転車にまたがったまま学園の校門前で雲に隠されること無く、都会の光にも負けない綺麗な光を放つ月を眺めていた。すると、月明かりに照らされて校舎の中から人がでてきた。

「よう、春日。相変わらずあの先生の説教は長いな。もう二時間近く待ったぜ。」

中から出てきた人物、春日に声をかけるとなんだか鳩が豆鉄砲食らったみたいな顔になった。そりゃそうだろうな。普段話もしない男が、あたかも『君を待ってました』みたいな事を言ってるんだからな。

「……氷上君、学園に何か用事ですか？」

「だから、あんたを待ってたんだって。」

質問に答えると、春日は？マークを頭に浮かべていた。

「なんか用事でもあるんだろ。教室で時計ばかり気にしてたし。自転車で悪いけど乗せてってやるから、用事があるんならさっさと

乗れ。あんた、確か徒歩通学だろ。」

これ以上別に何もはなすことも無いので、さっさと用件を済ますことにする。春日は戸惑いながらも俺の後ろに座ったので、力いっぱい自転車をこいで加速をつけた。

その後は春日の指示通りに進んでいく。徒歩通学と言うには少し遠く、30分近くこいでも、春日の家には着きそうになかった。

「……あんた、自転車通学にした方がよかったんじゃないか？」

「日々日頃から部活のために少しでも体力をつけようと思ひまして。」

意外と部活熱心なことだな。見るからに温室育ちっぽそうなお嬢様みたいだが、イメージとは少し違ったみたいだ。

そう思うと、少し春日の私生活が気になったり。

（おいおい、何考えてんだ、俺？）

アホなこと考えてないで、今は自転車をこぐことに集中しよう。ちようど目の前には坂道があったので、俺は立ちこぎで力いっぱい坂を登っていった。

長い坂を登り終わると、次は長い下り坂がきた。東京とは思えないほど静まり返っている道で、車など通りそうも無かったので、俺は一気にその坂を下ることにした。

「ちよっとスピード出すぞ。」

登ってきた時と同じくらいの力でペダルに力をこめる。自転車は車に負けず劣らず、かなりのスピードを出して坂を下り始めた。

「キャ……ッ！」

いきなりのスピードに慌てた春日は、反射的に前にいる俺に抱きつくような形になった。不覚にも、かなり心拍数が上がってきた。

「おい、春日……」

「す、すいません……でも、こんなに速いと……」

まあ、確かにいきなりスピードをあげられたら、落ちないためにこういう行動をとるのも仕方ないか。どうせ少しの間だけだ、我慢するでしょう。

しばらくしたら下り坂も終わり、スピードも徐々に落ちていく。

「あ、そこです。」

坂を少し過ぎたところで、ようやく春日の家に着いたようだ。しかし、自転車で30分以上っていうのは、ホント徒歩で行くには遠いよな。

春日が指差した家の前で自転車を止め、春日を下ろした。春日の家は何の変哲もない普通の一軒家だった。

「氷上君、わざわざありがとうございました。」

「ん、別に暇だったからな。」

それだけ言って、家の帰路に向かって自転車をこごうとした。が、春日に袖をつかまれ、進むことは出来なかった。

「あ、あの、氷上君。ちょっと手伝って欲しいことが……お願いできませんか？」

「暇だから別にいいけど、何かすりゃいいのか？」

そう答えると、春日はニツコリと笑った。

「お誕生日、おめでとう!!」

リビングの中で、パーン!と、景気よくクラッカーの音が鳴り響く。そのクラッカーの後に、小さな男の子がリビングのテーブルの上に置かれているケーキにさされた4本のろうそくの火を消した。

「実、はい!プレゼントだよ!」

その男の子、実に小さい女の子が小さい箱を渡した。その箱を開けた実は、とても喜んでいた。

「わーい！ありがとう、美穂！」

「はい、これは彩から！」

彩という子も、実に可愛らしくラッピングされた箱を渡す。実も、その箱を受け取って大喜びの様子だ。

「……なるほどな。弟の誕生日だったわけだ。」

確か聞いた話だと、春日の家は両親が長いこと出張でいないそう。だから、春日はこの子達の親代わりなのだろう。春日の少し年齢不相応な大人っぽさもそこから来るものなのだろうか？

「本当は、今日は部活を休んでもっとちゃんとケーキも料理も作ってあげたかったんですけどね……」

その声は、少し沈んでいた。そういや元々、部活だって先輩に頼まれて仕方がなく入っているだけらしい。本当なら、部活もせずに弟や妹達の世話をしたいのだろう。

「別にそんなこと気にしてないよ？ お姉ちゃんだって学校生活を楽しむ権利があるんだから。」

姉に、というより親にじゃれるような感じで実が春日に抱きつく。春日ファンが見たらどう思うことやら。にしても、ロウソク4本ケーキにさしてたって事は、こいつ4歳だろ？ 権利だとかなんだとか、難しい言葉知ってんな。

「それに、お姉ちゃんが彼氏連れてきてくれたのが、僕嬉しい！」

実がそういった瞬間、ポツ、と俺と春日の顔が紅くなった。このガキ、本当に4歳か？余計な言葉ばかり知ってやがる。

「あゝ！やっぱり亜沙美姉ちゃんの彼氏だったんだゝ！」

そういつて美穂が俺のところに寄ってくる。

「いつ頃から付き合ってるの？」

「ち、違うって！お、俺たちは別に！」

この夜は、俺と春日がこんなチビッコどもにいいようにかかわれて時間は過ぎていった。

「今日は本当にありがとうございました。」

11時ごろになって、ようやく元気なチビッコたちは眠りについてた。俺はリビングで春日と一緒に片付けをしている。

「どうせ家にいても暇なだけだな。むしろ楽しい時間を過ごせてよかったよ。それに、わざわざ晩飯も食べさせてもらったしな。」

色々と飾りまでしてたし、皿の数も半端ないのでこの調子だと家

に帰れるのは日付が変わった後になりそうだ。

俺の予想通り、片付けが終わった時点で11時半。家に着くまでには必ず日付が変わるな。

「さて、片付けも終わったし、そろそろ帰るな。晩飯、ごちそうさん。」

「はい、今日は本当にありがとうございました。でも、一つだけ聞いていいですか？」

俺は頷き、質問を促した。

「なんで、わざわざここまでしてくれたんですか？」

そう聞かれると、俺は答えることができなかった。なぜなら、その答えは俺自身が聞きたいことだったからだ。

滅多に話したこともないし、何かしてやる義理もない。でも、ふと気付けば一人で家まで帰り、自転車をこいで学園まできていたんだ。

「さあな。暇だったからかな？」

と、適当なことを言っただけでその場をごまかした。

その後、俺は春日の家からでて、外においてあった自転車に乗って帰路へと向かった。夜の夜風は厳しかった。しかし、何故だろう？家に帰るまでも、そしてその後も、俺の意識の中に寒さなんてものは微塵も入り込んでいなかった。

続く

第四話 「不思議な感覚」 (後書き)

ようやく大学入試が終わったので、これから大体周一のペースで投稿できると思います ^^

これまで投稿がほとんど出来ず、本当にすいませんでした。これからはしっかりとしたペースで投稿していきますので、なにとぞよろしく願います ^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3611b/>

赤い糸の先には…… ～Feelings of Kyoya～

2010年10月12日17時14分発行